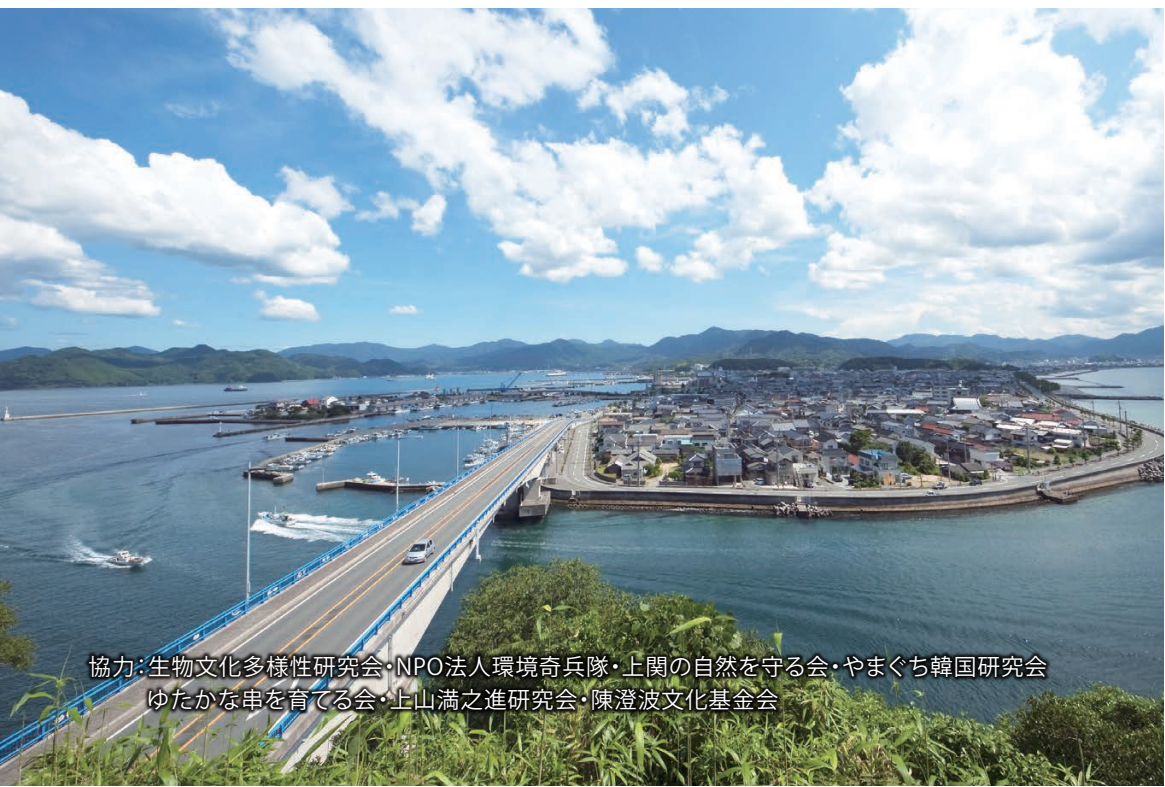


東アジアに きらめく

長州やまぐちの遺産 自然と文化の再発見

安溪遊地・井竿富雄 編著
金恵媛・今村主税・全京秀
中島美帆・安溪貴子・渡辺滋
鈴木隆泰・川口喜治・A.セネック 著



協力:生物文化多様性研究会・NPO法人環境奇兵隊・上関の自然を守る会・やまぐち韓国研究会
ゆたかな串を育てる会・上山満之進研究会・陳澄波文化基金会

山口県立大学ブックレット「新やまぐち学」No. 6

東アジアにきらめく

長州やまぐちの遺産・自然と文化の再発見

金恵媛・今村主税・全京秀・中島美帆・安溪貴子
渡辺滋・鈴木隆泰・川口喜治・アンドリュー＝セネック 著
安溪遊地・井竿富雄 編著

協力：生物文化多様性研究会・NPO 法人環境奇兵隊・上関の自然を守る会・
やまぐち韓国研究会・ゆたかな串を育てる会・上山満之進研究会・
陳澄波文化基金会

企画：公立大学法人山口県立大学

文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」

巻頭言——「新やまぐち学」は何をめざすか

この報告集は、山口県立大学が文部科学省の支援を受けて実施している「地（知）の拠点整備事業（略称COC）」の「やまぐち学」プロジェクトの成果の一部である。発足以来の「地域貢献型大学」として、山口県内の地域課題の解決に向けてそれぞれの専門分野からの成果の蓄積のある山口県立大学の地域との連携力を発揮した研究活動の成果を地域に還元し、世界に発信する試みである。

われわれは、われわれの暮らす山口県のことを、どこまで知っているのだろうか。さまざまな思い込みによって、事実とは異なる印象をもっているということはないだろうか。いったん思い込みを離れ、虚心に自然の姿を見つめ、史料を見直し、地域の伝承に耳を傾ける時、これまでとは違う、新しい山口県が像を結ぶのではないだろうか。それを、現在の山口県の県境に閉じ込めることなく、東アジアの中に位置づけてみたい。

それにしてもどこが「新」なのか。「新やまぐち学」では、周防大島出身の歩く民俗学者・宮本常一が一五歳の時に父君からもらった一〇箇条の中の「人の見残したものを見るようにせよ。その中にいつも大事なことがあるはずだ……」をモットーにし、もの言わぬ自然の声に耳を傾け、大河ドラマには出てこなくても、吉田松陰の思想と行動に大きな影響を与えた僧・月性げつしょうや宇都宮黙森もくりんのような忘れられた人物にも光をあてることに努めている。

歴史の中の光の部分も陰の部分にも素直に目をこらして、忘れられがちなこうした自然と文化のゆたかな遺産を再発見したい。それを共有し、次世代に手渡していくところから、「東アジアにきらめくやまぐち」というアイデンティティ（帰属意識）の確立をめざしたいと願っている。

目次

「巻頭言」「新やまぐち学」は何をめざすか	2
序章 宮本常一のまなざし（安溪遊地）	5
第1章 流域の思想を生きる——玉野井芳郎と山尾三省（安溪遊地）	11
第2章 クジラの海峡文化論と交流共生（全 京秀）	27
第3章 ツルとともに生きてきた八代の人たち（今村主税編）	35
第4章 里山の豊かさを見直す（安溪貴子）	55
第5章 里山利用の歴史をさぐる（安溪貴子）	69
第6章 里海の豊かさを守る（安溪遊地・安溪貴子）	93
コラム それでもいま希望を語る（安溪遊地・安溪貴子）	118
第7章 マンガ・重源上人と徳地の佐波川（中島美帆）	121
コラム 幕末長州の食事と栄養（安溪遊地）	129
第8章 幕末維新長州僧の足跡をたどる（安溪遊地）	131
第9章 島地黙雷と足尾鉍毒被害民（安溪遊地・井竿富雄）	153

第10章	徳地串に残る禅僧今北洪川の碑文を読む (渡辺 滋・川口喜治・鈴木隆泰・安溪遊地) ……	165
第11章	花田仲之助と山口(井竿富雄) ……	175
第12章	台湾総督上山満之進と画家陳澄波(井竿富雄・安溪遊地) ……	195
第13章	毛利家の武道と山頭火の思い出(安溪遊地) ……	201
第14章	山口と韓国をつないだ仙崎港の歴史と今(金 恵媛編) ……	213
終章	地域学・宮本学・自分学(安溪遊地) ……	243
	引用文献・引用ウェブページ ……	261
	初出一覧 ……	270
	話者・執筆者紹介 ……	271
	COO「新やまぐち学」三年間の記録 ……	274
	編集後記 ……	276
	索引 ……	277
	Summary in English (Andrew SENNECK) ……	286
	奥付 ……	288

第一章 流域の思想を生きる——玉野井芳郎と山尾三省

安溪遊地

玉野井芳郎と地域主義

山口県出身あるいは防長二州に深いゆかりをもつにもかかわらず、その活躍や存在そのものが地元ではほとんど忘れられている人々がいる。

柳井市出身の経済学者・玉野井芳郎（一九一八～一九八五）も、そうした一人かもしれない。東京大学で経済史を講じたが、西欧起源の「経済学」研究ではあきたらず、全人類の全歴史の中で「人間の経済」を再発見しようと、エレンスト・フリードリヒ・シューマッハー、カール・ポランニー、イヴァン・イリイチなどの紹介を精力的にこなした。「地域主義」を唱えて定年後は沖繩国際大学教授となった。編者のひとり安溪遊地は、一九八一年沖繩大学に教員として在職中に土曜教養講座での玉野井の「ブータン王国訪問記」の講演を司会したのが初めての出会いだった（図1）。ちょうど熱帯アフリカ・コンゴの森の物々交換市を博士論文としてまとめようとしていた安溪は、玉野井の研究と地域への姿勢から多大の刺激を受けるようになった。山口大学教養部に職を得て、コンゴ川沿いの物々交換の市場をめぐる博士論文の草稿を玉野井に送ってコメントを求めた。沖繩とつないだ電話での玉野井の懇切なコメントは三時間に及んだ。「論文の途中からの労働時間の議論はアダム・スミスのようになっていて、経済学をやめた僕にとつては退屈。せいぜい注にするとところかな」とおっしゃったのが強い印象に残っている。

玉野井を山口に招いて講演してもらった時、米山荘べんざんという旅館に宿を予約した。電話の向こうで、一見さんいちげんはお断りらしかった老舗の宿の女将が言った言葉が印象に残る。「はい。柳井の玉野井さんね。」玉野井芳郎は、地元では大学教授としてというより、ガラスやサッシの商家の長男として記憶されていたのかもしれない。



図1 沖縄時代の玉野井芳郎夫妻とともに

インターネットで見ると、いま柳井市には一七か所の朝市や直売所があるが、これは一九七六年六月に玉野井芳郎が呼びかけて始まったものだという。東京での地域主義研究集談会の発足に先立って玉野井は柳井に還り、日曜朝市の発足を提唱している。『柳井日日新聞』は、第一回朝市の反省会席上で、「玉野井博士は感激のあまり、涙を流し声ふるわせて、祝辞と激励の言葉を述べた」と報道した（玉野井・中村、一九九〇、二六七頁）。巨大なグローバル経済に対抗しうる足もとからの地域主義の具体的な発露がふるさとの柳井で動き出したことが玉野井を感激させたのである。

山口市に玉野井芳郎を招いておこなった講演「大転換の時代——等身大の生活世界を求めて」では、肥大し操作不能の暴力装置と化した感のあるグローバル経済をいかに地域から飼い慣らししていくのかという問いに、エントロピーとエコロジーの視点で応えていくという内容であった。

その中に、米本位制で各藩が独自性をもっていた江戸時代の経済を、中央に財政権と行政権が集中する体制に変えた、松方正義を中心とする「実に巧妙な」手法についても触れた。まず米の禄を貨幣の禄に変え、さらに貨幣の禄を公債というペーパーに変え、それを最終的にインフレで無価値にしていく。そのうえで地租改正をおこなって中央の課税権を確立した。旧武士階層の力を奪って中央集権国家の基盤をつくった明治政府の政策についても述べている。

玉野井は学生たちに語りかけた。

地方自治体に権限がないだけに、中央政府としてはますます慎重に原子力政策をたてるべきなのです。放射性廃棄物の処理の問題がこれほど問題になっているにもかかわらず石川県の能登の方なんか原発ブームにわいております。山口県の上関町にも原発計画が持ち上がっていると聞いて、おどろいています。閉鎖性水域の絶妙な自然環境を誇る瀬戸内海にもしも汚染が広がるようなことにでもなったら取り返しはつきません。しかし、一九八〇年代に入ってから世界的にエネルギー需給の基調が大きく変わってきました。もうこれ以上は石油の需要も電力の需給もそれほど伸びないのではないのでしょうか。それゆえ国はもう少し柔軟な政策をとってほしいものです。(玉野井、一九八四、二二)。

このように西欧中心でも中華思想でもない世界観・宇宙観から山口県をひとつの例として東アジアにおけるその歴史を見直していこうというのが、「新やまぐち学」の基本となる研究姿勢である。

山尾三省と流域の思想

玉野井芳郎の知的冒険の方向とは一見逆向きのものであるが、やまぐちという場所から日本・世界・宇宙を見ていくという姿勢も大切である。山口県ゆかりの山尾三省が、のちに屋久島を舞台として自然の中の日々の暮らしを糧にして紡ぎ出した詩的世界は、強い喚起力を持ち、屋久島山中の廃村に多くの家族が移り住むほどの影響力をもっている。山口県の日本海に面する油谷ゆやにルーツのある山尾三省は、次のように問いかけた。

私たちはこれからどのように生きていけばよいのか。

私たちの社会は、現在を踏まえてこれからどのように展開したらよいのか。

私たちの世界は、すでにはじまっている新たな千年紀に向けてどのようなヴィジョンをもつことができ

るのか。

——「物事をまじめに考え、人生を真剣に生きている人であれば、この三つにして一つ、一つにして三つの問いから逃れることはできないだろう。」と彼は続けている。

最近のバイオリージョナリズムの認識では都市と地方の生活を厳密に分けて考えるべきではないとします。これはつまり文字どおりに言えば、私たちはみな同じ川の流れの中——「流域(ウォーターシェッド)」に在るということなのです。(一一四頁)

「アメリカ」と間違った名前と呼ばれる大陸の現代詩人のゲイリー・スナイダーと山尾三省がシエラネバダの山中で語り合った珠玉のことばの中で、「生命地域主義」などと訳されることもあるバイオリージョナリズムを二人が「流域の思想」と位置づける印象的な場面がある。

人間の引いた境界線に支配されて生きるのではなく、ひとつの川沿い、ひとつの盆地、ひとつの湖や海のほとりなど、自然のまとまりの中に、そこに生きるすべての生命とともに生きなおす(rehabitation)。それは、田舎に住むと都市に住むとに関わらず、現代を生きるすべての人の課題であるはずだ。

六二歳という早すぎる死を目前に、妻と子どもらのために三つの遺言を残した。恐ろしいテロや原発事故による被害や加害が我が事として切実に感じられるようになった今こそ、その遺言を噛みしめてみたい。

まず第一の遺言は、僕の生まれ故郷の、東京・神田川の水を、もう一度飲める水に再生したい、ということ。神田川といえ、JRお茶の水駅下を流れるあのどぶ川ですが、あの川の水がもう一度飲める川の水に再生された時には、劫初げうしよに未来が戻り、文明が再生の希望をつかんだ時であると思います。……



図2 山尾三省（左）と安溪遊地。糸島での野草塾で初めて出会った頃

第二の遺言は、とても平凡なことです。やはりこの世界から原発および同様のエネルギー出力装置をすっかり取り外してほしいということです。自分達の手で作った手に負える発電装置で、すべての電力がまかなえることが、これからの現実的な幸福の第一条件であると、ぼくは考えるからです。……

遺言の第三は、この頃のぼくが、一種の呪文のようにして、心の中で唱えているものです。その呪文は次のようなものです。

南無浄瑠璃光・われらの人の内なる薬師如来。

われらの日本国憲法の第九条をして、世界の全ての国々の憲法第九条に組み込まさせ給え。
武力と戦争の永久放棄をして、すべての国々のすべての人々の暮らしの基礎となさしめ給え。……

二〇〇〇年八月二七日、安溪遊地と安溪貴子はコンゴ民主共和国とケニア共和国の友人たちを迎えて、森林保全とエコツーリズムの可能性についてのワークショップを屋久島で開催していた。夜は、夜風の涼しい宮之浦川のほとりで、語って呑んで歌った。元気な人たちは服のまま川にも飛び込むというにぎやかな宴がつかえるころ、島の若者たちにとつての精神的支柱のひとつであった三省さんが亡くなったという知らせが届いた。笑いさざめいていた仲間たちは抱きあって泣いた。翌日、わたしたちは、お宅におじゃまして「三省さん、ありがとう。すべての川の水が飲めるようになるというあなたの夢を、僕らも追いかけてゆくよ」と語りかけ、「いつの日にか帰らん山は青きふるさと水は清きふるさと」の歌をオカリナで合奏し

たのだった。

三つの遺言を残してこの世を去った山尾三省が、五歳から小学三年生の終わりまでを過ごしたふるさとの油谷町での日々を、九二歳になる伯母が語り、それを書きとめたものは、まるで石牟礼道子の世界だ。それとともに、山口県の田舎での子ども時代の経験がいかに大切であったかをも教えてくれる。

この背戸の湧き水は、まっことよき水でありました。それはそれは美味しゅうありました。「山紫水明ちゆうのはこの地のことぞ、甘露云うはこの水のことぞ」と祖父の自慢げに云うをわたしは何千回聞かざれましたことか。……近隣の家からも汲みに来られるほどの千金値の水にてありました。三省が年長じて美^はしき水求め歩いたと云うも、この背戸の湧き水に原点があるが……と、常^{いっそ}に思いよります。

波の音と読経の響こう道元山の広い百姓家での数年の生活が、この先の三省の歩きよらした道の、修行僧にも似たその、とにもかくにも出発点でありましたろうことは、東の空より日が昇り西の空に日が沈むほどに確かなことと思っております（黒瀬、二〇〇〇）。

いのちの危機の時代

国立大学から教養部がなくされようとしていたころ、山口大学教養部の「いのちと環境」というオムニバス授業の中で、安溪遊地は、鬼頭秀一、門倉正美、いまはなき湯川洋司ら二二人の教員仲間とともに、若者たちに次のように問うた（安溪・鬼頭、一九九二）。

今日うまれた子どもたちが成人する二〇二二年に、われわれの地球はいつたいどうなっているでしょう

か。そのとき、われわれは、健全な水と空気と土を、彼女らや彼らに手渡せるでしょうか。緑なす熱帯の森とそこに住む人々や動物たちは、その時も生き残っているでしょうか。日本の農業はまだ元気でしょうか。田舎の村々には老若男女の声が響いているでしょうか。自然を畏怖し、その自然に生かされてきた人々の知恵はしっかりと受け継がれているでしょうか。今、世界中で話されている二〇〇〇とも三〇〇〇ともいわれる言語のうち、はたしていくつがしゃべられ続けているでしょうか。ゆたかな、おもいやりのある心のひろがり、人と人の間にも地域にも満ちているでしょうか。さまざまな差別と貧困や病いに苦しむ人々はもういなくなっているでしょうか。もう戦争の不安におびえることはなくなっているでしょうか。

今まさに、われわれは、「いのちの危機」の時代を生きています。二二世紀の到来を目の前にして、この地球とともに生き、これから生を享けていくことになる、人間を含むすべての生命にたいして、わたしたちはどのように考えていったらいいのでしょうか。

これは、コロンブスの「新」大陸到達から五〇〇年という節目の年に、世界各地の文化と自然の多様性の破壊の歴史への反省にたつて、あらたな五〇〇年をいかに生きるべきかを問うたものであり、私にとっては、単に考えるだけではなく、そのはじめの二〇年間の具体的な行動計画を見いだすことを自らに課した問いでもあった。

二二世紀に入ってから、例えば九・一一事件後の「テロとの戦い」の中で起こった様々なできごとや、気候温暖化二酸化炭素主犯説の「不都合な真実」の報道などのために、平和や人権や環境の、そして何より人類と地球の未来について、最近、すっかり弱気になっているかもしれないあなたとともに考えてみたい。環境問題の深刻化で、人類のおかれた状況が、霧の中の冰山にぶつかる寸前の巨大船に乗っているような状態だとしても、破局を回避するさまざま

なシナリオは理想主義的なもので、経済成長を前提としたさまざまな活動をやるわけにはいかないのが現実だ、と考えるかもしれない。そうした考え方を政治学者ダグラス・ラミス（二〇〇〇）は、破局にいたるまでそれぞれの持ち場だけを見て日常生活を続けようとする「タイタニック現実主義」と呼んで批判した。むしろ、状況が絶望的であることを正直に認めあうとき、そこから目を背けていたときには得られなかった新しい希望がわいてくる（メイシー、一九九二）。そして、自分の生きる場所である足もとこそが、問題解決の最前線なのだと思付くのである。

チエルノブイリ事故直後のフランスで暮らす

私（安溪遊地）は、一九八六年からフランスのパリで二年近く家族で暮らしたことがある。アフリカ地域研究のために、国際文化会館の新渡戸フェローシップをいただいたのである。世界都市の交流の豊かさはあったのだが、大都市の環境は悪く、二月になると煤煙のせいか喘息のような症状に悩まされた。

フランスで果物の不思議な食べ方に出会った。知り合いの家に招待されて食後のブドウが出たとき、数粒ずつ机の上のボウルに入れた水に浸しては皮と種子ごと食べるのだ。真似をしながら理由を聞いた。「皮についての放射能を落とすためですよ、長く水につけると味がおちるのよ。」という返事に、笑いをこらえながら「除染」を続けた。

当時四歳の息子を含む家がフランス滞在は、チエルノブイリ原発の事故の影響がヨーロッパ全土で深刻化する時期と重なっていた。庶民には防衛する知識もなく、原子力大国のフランス政府の発表は、「チエルノブイリの影響は無視できる」の一点張りだった。その一方で、プルトニウムを燃やす増殖炉スーパーフェニックスは、大規模な金属ナトリウム漏れ事故を繰り返して死滅に近づいていた。私は新聞を毎日買って自己防衛の方法を模索し始めた。

半農半Xの暮らし

「グローバルに考え、ローカルに行動せよ（Think globally. Act locally）」という言葉がある。しかし、「グローバル」

な事象を、自らの暮らし方を根本から変えてしまうような行動につながるほどの実感をもって捉えることは非常に難しいのが現実ではなからうか。

自分の足もとで、これだけは確かだというところから考え、行動しながら、それを最終的にはグローバルな理解に広げる方法はないものだろうか。そこでつかんだものであれば、あるいは、説得力をもって話せるかもしれない。環境問題を人に話すときに難しいなと思うのは、自分自身が環境に配慮しない暮らしをしていたのでは、誰も耳を傾けようとしないうという事実である。その意味で、山口大学での「いのちと環境」の授業紹介の結びを私としては「考え、行動するきっかけをつかみましょう」としたかったのだった。

「知るは難く、行は易し」という孫文の言葉がある。本当に納得したら、その瞬間から人は変わり、行動にも現れるはずだ、という意味だと私は理解している。わが家の場合、「知ること」は、一本のビデオ『ポストハーベスト農薬汚染』（小若、一九九〇）から始まった。それがわが家の暮らしを根底から変えたと言っても過言ではない（安溪、一九九三）。輸入レモンやオレンジは食べなくても困らなかつたが、収穫の後に農薬処理をされていない国産大豆の豆腐や国産小麦のパンなどは当時どこでも手に入らなかつた。輸入トウモロコシの飼料の汚染を考えると、牛乳も卵も肉もだめかもしれない……。妻は、スーパーに行っても何も買えずに帰ってくるが増えた。このとき、家の前の小さな田んぼを借りられたのは幸いだった。そこに子どもとともに植えたジャガイモが収穫できるのを待ちわびてそれを朝食に食べ、サツマイモを小さな畑一面に植えた。そのあと西表島でひと夏をすごして帰ってみるとありがたいことに雑草の中に取りっぱなサツマイモが育っていた。

これがきっかけとなり、一九九三年には、鳥取県東伯町（現在は琴浦町）の大山のふもとの小さな村で一年をすごして田畑を借りた。津野幸人鳥取大学農学部長を師として、再生紙マルチ稲作に挑戦した。この年は、東北地方を中心に稲が大凶作となった年で、タイ米輸入で日本中がパニックになっている中、農薬も除草剤も化学肥料も使わない自家製の、家族一年分の飯米を枕元に積み上げて寝るといふ、この上ない幸せを味わうことができた。有機栽培され

た稲は、冷害に強かったのである。

一度覚えた「半農半X」あるいは、第三種兼業農家（農業収入をめざさない農的な暮らし）の楽しみは、その他のことには代え難く、山口に戻ってから、つてを求めて田を借り、山の中に土地を求めて地元の木で家を建て、自分の家のまわりの山の木を主な熱源にして暮らすようになるまでには、それほど大きなギャップはなかった（安溪・安溪、一九九七）。

一五年無農薬の田んぼを耕したところで、二〇一〇年になって地主から田を返して欲しいと言われた。あとを使うこともないというので、返還要求の理由はつきりしなかったが、わが家が田舎に住むことを選びとつた最大の理由が簡単に失われてしまったのである。そして代わりに借りたり購入したりできる田んぼもなかなか見つからなかった。

その時、自宅から四〇キロ以上離れた、津和野町にほど近い山口市阿東地区の源流部に空いた田んぼ六〇アールと小さな家があるという報せを友人がもってきてくれた。福島第一原発事故のために、知人の家族が有機農業を断念したということなどにも背中を押されて、思い切つてその土地と家を買った。家族で田草を取り、放射性セシウムの量も測つて安全を確認しながら無農薬米の販売も始めた。ブランドは「阿東つばめ米」とした。こうしてわが家は息子が農業者になるという道を選び、フクシマ以後の世界を我が事として生きるための新たな一歩を踏み出すことになった（安溪・安溪、二〇一四）。

山で薪を作りながら考える「重層する環境ガバナンス」

ここで、わが家が所有・管理する約一ヘクタールの雑木林を舞台に、この林を管理するのが家だけではないことを紹介してみたい。ここは、暖房と風呂用の薪を調達する場所だ。まず、

A. どの木を伐り倒すかは、家族で相談して決めればよい。

このことは、明らかなことだ、と思っていた。ところが、あるとき山の中でチェーンソーのうなる音が聞こえて、

太さ三〇センチ近いわが家のアカマツの木が次々に倒されたのである。駆けつけてみると、近所の人たちが松枯れがまん延しないために被害木の伐倒駆除を行っているとのことであった。この場合は、慣例で、

B. ことわりなしに個人有地の木も切つてよいことになっているという。

郷に入つては郷に従えであるから、黙つていた。ところがその後、倒した松の幹に石油溶剤に溶かした有機リン系の農薬（フェニトロチオン）を原液のまま一斗缶から大量にかけるのが決まりだったのである。私は、子どものころ、富山県の米どころで育ち、パラチオン散布の赤い旗が立つ田んぼの中の道を通学したためか、有機リン系の化学物質に強いアレルギーがある。一息吸いこむだけで、猛烈な頭痛に襲われ、それが三時間ほど続く。自分の山なのに、原液を散布された場所には一年ぐらいいも近づけないことになってしまったのである。翌年からは、倒したあとすぐに薪にするから薬剤を散布しないで下さい、と頼み込んでなんとか了承された。ところが、六月になると、松枯れの原因とされるマツノザイセンチュウを媒介するマツノマダラカミキリを殺すためとして、ヘリコプターからの空中散布が行われていることを知った。たとえ濃度は薄くても、私の山に撒くことはぜひやめてほしいものだ。そこで、

C. 松枯れの空中散布を行っている市役所の担当部局に電話してみると、「地元からの要請があるから簡単には止められません」という返事だった。

いろいろご近所とも話をしてみるうちに、任意団体である自治会の会長が、地区住民にはかることなく市への要請を出し続けてきたことがわかった。そこで、農協の組合長などの地域リーダーたちに、空中散布の害や散布を止めた地域の新聞記事などを示して疑問を投げかけたところ、同じ集落の隣人でもある自治会長から二年間にわたつてまったく口をきいてもらえないという扱いを受けるようになった。数年を経て、県レベルでの松枯れ空中散布の見直しが行われるという情報をつかんだ私と妻は、県内の空中散布反対の友人や団体と連絡をとりあつて、

D. 市町村からの要請や、松林の残存状況を踏まえ空中散布を行う地域を決める県の委員会に代表を送つて反対意見を述べた（ウェブページ・ふしの川清流の会）。

その結果、二〇〇七年度、山口県全体で五〇%減、山口市で六〇%減、仁保地区では一〇〇%減の決定がなされたのであった。田舎暮らしを選んだわが家が、山の中のきれいな空気の中で、化学物質に汚染されない暮らしをしたいというささやかな願い（Aレベル）を実現するためには、以上のようなB～Dレベルの取り組みと一〇年を越える年月が必要だった。

このように、自分の所有の山なら、その環境の管理は、すべて所有者である自分の思いのままとはいかなかったのである。しかし、幾層にも縛りがかかっているこうした状況がむしろ普通ではなからうか。そこで、「重層する環境ガバナンス」という考え方で、わが家を取り巻く状況をもう一度整理してみたい。ガバナンスとは、統治と自治を統合した概念であり（松下、二〇〇二、一三頁）、「協治」とも訳される（日高・秋道、二〇〇七）。

まず一番重要なのは、直接にその環境（ここでは松の生えた雑木林）を利用する家族単位の層（Aレベル）である。その次が、隣近所の層（Bレベル）であり、任意団体としての自治会もここに含まれるだろう。日本においては、次は市町村の層（Cレベル）で、これに都道府県の層（Dレベル）が続く。わが家の山での空中散布の問題は、山口県の委員会での意見陳述（Dレベルへの働きかけ）で決着がついて、山口市（Cレベル）は、自治会長の不満（Bレベル）にもかかわらず、私の住む地区での空中散布の中止を決定し、合わせて伐倒した松への農薬散布も中止されたため、わが家は思い切り深呼吸できる幸せ（Aレベル）を手に入れたのである。実は私たちは、もしも山口県でも決着がつかない場合に備えて、国会が松枯れの空中散布を時限立法で制定した経緯から批判すべく（Eレベル）、データの収集はしていた。この先は、空中散布とは直接関係しないが、例えば大陸からの汚染物質の飛来によるアレルギー症状などに対処しようとするれば、政府間パネルを設置しての調整（Fレベル）が必要になるだろうし、地球全体を汚染する核実験や原発事故などを未然に防ぐには、国連や国際原子力機関などのまさにグローバルなガバナンス（Gレベル）が必要となるのである。

このように、汚染されない安心して生きられる環境を求めて田舎で静かに暮らしたいと願っても、それを実現する

ためには、AレベルからGレベルにおよぶ、多様な環境ガバナンスの層への働きかけが必要になることがある。

なお、これらのガバナンスの層が上下関係にあると考えるのは適切でない。それぞれカバーする地理的な広がりや異なり、それぞれに役割があるのである。そして、国境を越えて存在する河川や湖の場合に明らかのように、環境を協治していくために必要なガバナンスの地理的広がりや、人間が恣意的に引いた境界線とは一致しない場合が多い。このような自然の循環が定めている境界にそって生きることを、bioregionalismと呼ぶが、上述のように山尾三省は、これを適切にも「流域の思想」と訳した（スナイダー・山尾、一九九八）。

環境ガバナンスに注目する理由はもうひとつある。地域の資源あるいは地球環境の「賢明な利用 (wise use)」とは何かを考えるにあたって、価値判断を伴う賢明・非賢明を論じだしたら、立場が違うステークホルダー（利害関係者）が合意に達することは非常に難しい。それよりも、多様で重層的な環境ガバナンスのあり方とその相互の関係を分析しながら共存への道がないか考えてみてはどうだろうか。過去の事例についても、「なぜそうしたのか」と動機を過重に評価することや、「結果よければすべてよし」といった再現性のない評価をするのではなく、人間からの働きかけと自然の応答のプロセスとその相互作用をきちんとしたデータによって扱うことができる可能性がより高いのは、重層する環境ガバナンスに注目することであろう。

現在への問いかけ——「賢明度」を推測する

ダイヤモンド（二〇〇五）の『文明崩壊』は、過去に滅びた諸文明の陥った環境面での落とし穴を詳しく分析しているが、その失敗を笑う資格は現代人にはない、ということを繰り返して指摘している。なんらかの方法で、現在進行中の「賢明でなかった」と後世に評価されるような環境破産 (environmental bankruptcy) を察知し、警報を発し、未然に防止することはできないものだろうか。そのために、重層する環境ガバナンス論が使えなくてはならない。

①環境の「協治」が実現するためには、同じレベル（同じバイオリジョン）の利害関係者の間で、情報の共有が

行われることが必要である。情報の秘匿や偽装が行われる時「賢明でない利用」が進行中である可能性が高まる。第三者として学問的な正確さを主張することが、結局は公害の原因の隠蔽につながったことを肝に銘ずるべきである。

② 正確な情報に基づき、環境の変化のスピードをおりこんで柔軟に対応できる環境ガバナンスで順応的管理ができるならば、手遅れになることを防げる可能性がある。完成までに何十年もかかる多目的ダムが、完成の暁には「無目的ダム」になる例や、日本の内海で最高の生物多様性をもつ瀬戸内海長島に一秒間に一九〇トンの温排水を出す上関原子力発電所を建設する計画が、環境影響評価法に対応しない「方法書」抜きの環境アセスメントで進められている（安溪貴子、二〇一〇）といった例がある。

③ 同じレベル、あるいは隣り合う層の環境ガバナンスの対立が起こったとき、広域の環境ガバナンスがこの対立を調整できるならば、危機は回避できるかもしれない。しかし、逆に、例えば国策であるからという理由だけで、より狭い領域のガバナンスを地域エゴとして頭から否定するならば、危機は深まるばかりである。

④ 重層し連関する環境ガバナンスのどれかの層で「協治」の機能が停止し、そのガバナンスが機能不全に陥ったとしても、その役割をある程度補充できるような体制が取られているならば、希望はある。政府組織を監視し補完するNGOや学会の役割がここにある。とくに、戦争の場合には、いくつもの環境ガバナンスの層が一度に機能停止させられることがあって、環境のみならず、八重山での戦争マラリア¹のような甚大な人的被害を引き起こすことがある。

⑤ より広範な地理的範囲を覆う環境ガバナンスほど、その影響は甚大なものとなる。例えば、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、一三〇か国が参加し、各国政府の決定に大きな影響をもつものであるが、一九九八年以降地球の平均気温が上がっていない事実などを隠蔽する組織的作業をおこなっていたことが、二〇〇九年一月一七日にネット上に流出した膨大なファイルから判明し、ニクソン政権下のウォーターゲート事件をもじって、クライメイ

1 第二次世界大戦末期、沖縄県南端の八重山地方で、マラリア地帯に強制疎開させられた住民の多数がマラリアに罹患し、戦闘よりも多くの人命が失われた事件。

トゲート、IPCゲートなどと呼ばれている（モシャー・フラ、二〇一〇）。あらためて研究者の重い責任について警鐘を鳴らしておきたい。

歴史と伝承に学び生物文化多様性を生きる

現在の最先端の科学である、予防原則に基づいたリスク管理にも関わらず、なお人知を越えた危機が襲いかかるかもしれない。その時に大切になってくるのが、それぞれの土地で古くから伝えられた歴史的記録とそれを豊かに肉づける伝承に学ぶことではないか、と私は考えている。

伝承の中には、確かな経験にもとづくものがある。例えば私が今の自宅を建てようとしたとき、地域の人から「オジリに建てよ、エキジリには建てるな」という助言を受けた。山の尾根の下（尻）に建てて、浴（エキ）すなわち谷筋の下方には決して建てるな、というのである。それが、数十年に一度の頻度で、大きな土石流被害を経験してきた花崗岩地帯に住む人々の智慧だった。二〇〇九年、山口県の豪雨で七月二一日にわが家から数キロしか離れていない特別養護老人ホームが土石流に埋まり七人が亡くなった。この事故も、計画段階でよく地域の伝承を聞き取りしていれば、あるいは防げたかもしれないと思うと無念である。そうした伝承が世代を越えて生き続け、人々を数百年に一度の大津波から救うこともあった。西表島でも人魚を殺した天罰の話や地名など、津波の記憶というべき伝承を聞いた。そして、単なる個別の伝承ではなく、それが自然との共存の智慧の体系をなしていると考えられる時、私は、それを「生物文化多様性 (biocultural diversity)」と呼びたい (Ankei 2002)。これは、単に「ある土地にある生物多様性と文化の多様性」をひとことで表現したものではなく、生物文化多様性を、「ある土地 (bioregion) の生物多様性とその恩恵を受けてきた地域住民のもつ土着の文化に基づく行動様式によって生物多様性が守られているような相互関係」という意味で使うという提案である。やまぐちこそは、そうした生物文化多様性の高い暮らしができる場所でありうるのである。

これは、やまぐちという地域を離れた一般論のようであるが、そうではない。大学教員のかたわら自然に密着した生活ができるという仕合わせは、大都市ではあり得ない。ここに述べたのは、適密と適疎という分散型の人口配置をもつやまぐちという地域のすぐれた特長を活かした日々の暮らしの中で、体を動かしながら思索した結果である。玉野井芳郎の夢見た、地域社会に埋め戻された「人間の経済」を生きながら、他の流域との交流をはかるという取組ができる場、それがやまぐちなら創りうる、という確信を伝えようとしたものである。

そのような拠点をネットワークとして広げていく仕組みを模索するために、私が妻の安溪貴子とたちあげようとしているのが、「生物文化多様性研究会」である。地域に伝わる自然との共存の智恵や経験に耳を傾けながら聞き書きをつくり、子ども達とともに「田んぼの生きもの調査」をしたりするという活動をしているのだが、農的暮らしから生み出されるものを、グローバルな貨幣以外のものと物々交換する仕組みをいろいろと作って、より実践的にやまぐちの暮らしを潤していきたいというのが、わが家の当面の野望であるらしい。